

だけでなく、日常の社会関係では満たされない何かを埋め合わせている。ほとんどの事例で援助交際の当事者である女性が経験しているのは、三十代、四十代の男性の「自慢話」や「愚痴」を聞く、聞かされるということである。考えてみれば、「オヤジ」と呼ばれる三十代、四十代の男性が、二十代前後の、彼らと一世代も違うような女の子と「ノリ」を共有するようなコミュニケーションをとれるはずもない。だから自分が「どんなに偉いか」とか、「どんなに苦労しているか」を話すほかないというふうにも考えられるが、そういう男性の「熱」に対して、女性の方はずっと冷やかなな目で見ています。「一生懸命聞くふりをしている」、「これ（話を聞くこと）もお金のうちに入っている」という気持ちで男性に対応している。男性側にしてみれば、援助交際を通しての性的な交渉によって生じた擬似的な親密さは、自我のたがを緩め彼らを脱社会的な存在に変える。こうした性的な関係によって形成された脱社会的な場は、仕事や友人、家族といった日常の社会関係において話すことのできない事柄を話す機会を提供し、当事者たちにとっての本音を語らせる。

もちろんこのことは男性だけでなく、女性にも当てはまる。実際に直接耳にした事例でも、援助交際が形成した脱社会的な場において、友人や両親に話すことのできない離婚の相談を援助交際の相手にする主婦や、自分の日常の不満やセックスについて積極的に話しかけているという女性もいる。しかし聞いた限りでは聞き役に回るのは女性が多い。このことを援助交際のもつカウンセリング機能と呼ぼう。このカウンセリング機能には、性的な緊張や欲求を埋め合わせる機能と、社会関係の軋轢に起因する心理的な不安を埋め合わせる機能の二つがある。後者の機能は俗に言う風俗産業と比較して、援助交際というコミュニケーションが顕著にもつ特性でもある。

次の事例を見ることで援助交際のもつカウンセリング機能について考察してみよう。サクライと名乗る23才のOLは、四年前（19才）の出来事を話してくれた。

<データ6> ():筆者補足

筆者：今まで援助（交際）してきた中で、こ

の人は忘れられないとか、覚えていることとかある？

サクライ：（前略）そんな時に知り合った人が36才で結婚している人で、子供がいなかったんですよ。それであの、まゝ何回か援助という形で会ったんですけど、（中略）お正月すぎて、で、向こうが実家が九州らしくて、九州行ったときに「おみやげ」って買ってきてくれたんですよ。ただあんまり大きいものだったら、ほら、奥さんにバレちゃうから、テレホンカード、九州のなんかどこか載っているようなのをもらったんですけど、そんな時にあの、テレホンカードの袋にもう1個、袋が入ってたんですよ。で、その時、気づかなくて最初、もらった時に、こうやって「テレホンカードだ、ありがとう」って、で、しまった時に、「もう1個、中に袋が入っているんだよ」って言われて、要は私がテレホンカードを袋から出せば、そこにもう1個袋が入っているのが分かったんですけど、出さなかったんですよ、こうやってパッと見て「ありがとう」って、こうやって閉めちゃったから、「中にもう一個袋、入っているんだよ」って出したら、なんか「お年玉」って書いてあって、中に5万入っていたのね、何でこんなにくれるんだろうって思ったら、自分に子供がいらないからなんかあげてみたいらしいんですよ。

（1998.3.20 収録）

この事例では男性と女性との間に親子的なロールプレイが行われており、少なくとも男性側にとっては欠落している親子的なコミュニケーションを補完している。ただこの親子関係が現実のものとは異なる点は、この会話の後二人は金銭のやりとりを前提にした性行為をしている点である。

援助交際が単純に、男性側が女性の性的な何かを求め、女性はその代償に金品を受け取るという行為ではないことが理解できる。次にカウンセリング機能であげた性的な不安や欲求を満たすことによって達成される性的な実存の問題を考察してみよう。